

「国包の築山」



国包の「クニ」は地域のこと、「カネ」は曲がった土地をあらわし、加古川の湾曲した地形から名付けられたという説もあるそうです。国包（上荘町）は、古代から加古川の水害に悩まされた地域です（先日の台風21号接近の際にも、上荘町に避難準備情報が発令されました）。鎌倉時代までは加古川西岸にあった集落が、1225年（嘉禄元年）8月の大水害で河原となってしまったため、住人が東岸に移動して集落を再建して現在に至るそうです。

1756（宝暦6）年、国包出身の長浜屋新六郎が大坂で商人として成功して得た富をなげうち、水害時の避難所として築山を築き、のちに築山神社が建てられました。

その後、国包は湯山（有馬）街道（姫路から三木を通過して有馬へ、さらに宝塚から大坂・京に通じる）の宿場町として、また、1594（文禄3）年の加古川の舟運が開発されると、木材・酒・米の集約地として栄えました。

丘の上には2本の榎が1本の棕の木を挟むように生えており、遠くから見ると1本の大木のように見えます。樹齢200年以上のこの木は、歴史的な由緒もあり、市の指定文化財に指定されています。（加古川市観光協会HP等参照）



集落の道路と比べて高くなっていることがわかります。

近くには大正期に竣工したJR加古川線の国包鉄橋も見られます。

